ホルトノキ



待降節を彩るポインセチア「幸運を祈る」

クリスマスメッセージ
クリスマスの緑

チャプレン　マーク・シュタール

欧米では、クリスマスに緑で家の中を飾る習慣が文化に深く根差しています。クリスマスツリーは言うまでもなく、それ以外でも、リース、ヒイラギ、ヤドリギも欠かせない緑です。このような伝統はどのようにして生まれたのでしょう。クリスマスの伝統はあまりに古くから根づいているため、ルーツをたどるのは簡単ではありません。長い時を経て、その伝統も変遷し、地域差もあり、個人の好みも反映されていったからです。その上で、今日多く見られるクリスマスの緑の由来を探ってみましょう。

〈常緑樹〉

クリスマスの季節を常緑樹で飾ることは、一貫した伝統です。記録によれば、中世後期のヨーロッパでは、教会はほとんど例外なく、冬にヒイラギやツタを購入しています。また、教会に限らず、一般家庭でも冬に緑を飾ることは慣習になっていました。郊外では、周りから容易にそのような緑を切り取り、家に持ち込むことができました。しかし、大きな都市では難しく、郊外から売りに来ている緑を購入することも珍しくありませんでした。冬の暗く湿った季節に、緑を家に飾ることは、視覚的に生命力を感じ、華やぎをもたらすだけでなく、松がもたらす香りも家いっぱいに広がります。「ひいらぎかざろう（Deck the Halls with Boughs of Holly ～：玄関ホールを飾ろうひいらぎの枝で～）」のクリスマスキャロルは16世紀にウェールズで生まれたので、この時期もヒイラギで飾る習慣があったことがわかります。他のキャロルでも、ヒイラギやツタが出てきます。ビクトリア朝になると、暖炉の上のマントルピースにヒイラギやモミで作った花輪で飾ることが流行りました。私の幼少期の1960年代も、モミの枝やヒイラギの大枝、ヤドリギ、ロリエなどで花輪を作り、居間を飾るのが一般的でした。



ひいらぎと蔦

〈リースやボウ〉

クリスマスリースの起源は、16世紀ドイツのルター派だと言われていますが、最も古い記録は、1833年にルター派の牧師が日曜ごとに、リースにキャンドルを立てて、ご降誕の物語を語ったというものです。この習慣は、各家庭や教会にも生き続けています。19世紀になると、リースを玄関扉に掛けることが一般化します。またの名をウェルカムリングと呼び、ヒイラギ、ツタ、松ぼっくり、リボンなどで飾りつけされました。リースとはやや異なり、ボウは枝を束ねて球状にしたり、花束状にしたクリスマス飾りです。材料は緑であれば種類はあまりこだわりがありません。壁や玄関にかけ、来客の歓迎を意味しました。1900年代初期になると、ますますリースやボウは装飾性が強くなり、りんご、オレンジ、造花などを加えて彩りが豊かになりました。



クリスマス・ボウ



クリスマス・リース

〈ヤドリギ〉

比較的、地味な飾りがヤドリギです。都会でヤドリギを探すのはどんどん難しくなっていますが、田舎に行くとあちこちで見られます。ヨーロッパのドルイド僧たちは、儀式としてオークの木に寄生するヤドリギを刈り取り、崇めました。そして、魔除けとして、冬場に家の内外にぶら下げました。これがやがて一種のクリスマスの伝統になったのです。1700年代終わり頃には、恋人をぶら下がっているヤドリギの下に招き、キスを求めることが慣例となりました。



ヤドリギ

〈クリスマスツリー〉

クリスマスの飾りとして最も親しまれているのがクリスマスツリーでしょう。ビクトリア女王の夫、アルバート公はドイツ出身で、1840年にイギリスにクリスマスツリーを紹介した人として称えられています。彼の少年時代、一本の木を丸ごと家に持ち込んで飾るようになりました。しだいにその飾りつけも派手になっていきました。1850年代頃になると、クリスマスツリーは特に上流階級で流行り、子どものパーティーにはなくてはならないものとなりました。木の種類を問わず、切り取って家に持ち込み、ろうそくを灯したり、飾りつけをしたりし、根元を多くのプレゼントで埋め尽くしました。やがて、この習慣が英国の一般庶民にも本格的に広まり、次第に北米、世界中へと波及していったのです。

さて、毎年、この時期に緑の飾りつけをする理由を考えると、多くの人にとっては、暗く寒い冬に目を和ませ、香りを楽しむためだけでも、十分なのかも知れません。しかし、キリスト教学校に関係する私たちにとっては、常緑樹は永遠の命のシンボルであり、春に命が新たに芽生える印なのです。リース、ボウ、ツタ、ヒイラギ、ヤドリギの緑に神様の息吹を感じましょう。



学校玄関のクリスマス・ツリー

中学一年便り

良い緊張感

中期が終わり冬休みを迎えます。入学してから八か月経ったと思うと時間の流れの早さに驚きます。四月の初め、新たな学校生活が始まる頃の状況を振り返ってみてください。未知の環境で緊張感に包まれ、慣れない日々を過ごしていたことでしょう。この緊張感には、様々な感情が入り混じり、新しい挑戦に対する期待と不安が入り交じったことでしょう。緊張とは、しばしばネガティブな要素と結びつけられがちですが、程よい緊張感があることは、実はパフォーマンスの向上に寄与すると言われています。つい最近、あるアーティストのインタビュー動画を視聴していたとき、「緊張しないステージは良くない。緊張感がないと無意識に手を抜いてしまうんだ」と話していたのがとても印象的でした。この言葉は、学校生活にも通じるのではないでしょうか。学校においても、適度な緊張感が時折必要とされる瞬間があります。授業での発表や部活動で公式戦に参加するときなどといった場面に臨む際には、緊張感があることで物事に集中することができ、最善のパフォーマンスを引き出しやすくなります。緊張感があれば、自分にとって重要な瞬間に真剣に向き合い、力を発揮することができるでしょう。四月のあの瞬間の緊張感は、自分が思っている以上に貴重な経験となっているはずです。あのときの感覚をぜひ忘れないでいてほしいと思います。未知の世界に飛び込んだ勇気や、新たな友達との出会い、そして自分自身の成長に繋がったことを感じながら、これからの学校生活も楽しんでいってください。

（志水　元）

高校一年便り

計画的に課題を片付ける習慣

そろそろ冬休みが近づいています。各科目で課題等が出されていることでしょう。クリスマスや正月にかまけて何もやらずに新学期の備えを無視してしまったらどうなるのでしょうか。当然、後期に満足な結果を得ることはできなくなってしまうでしょう。万が一、不合格がついてしまえば次の学年に持ち越して解消しなければならなくなる。高校は学年が進むごとに科目は増えるわ、内容はより難しくなるわ、卒論は出てくるわでより大変になっていきます。

厄介なことに、追試験等の課題を終えなければならないというプレッシャーは常に頭の片隅にこびりついていて、自分が使える脳みそのワーキングメモリを圧迫します。海外の研究によると何か常に気がかりなことがある場合、通常と比較して13％も脳の処理能力が落ちてしまう、これはアルコール中毒によって失われる知能と同程度の損失ということです。また、普段は忘れているようでも無意識は確実に覚えていて、「ヤバいよ、やばいよ」と叫び続けます。そのため、楽しいはずのことも十分に楽しむことができない。だから、余計やる気が起きないという負のスパイラルに落ち込んでいきます。

これを避けるためにも、やるべき課題があったら放っておかずにまず手を付ける。一度始めてしまえば敷居が低くなって割と簡単に終えることができるでしょう。

人生の課題もやらずに逃げると先への大きな負担となる。そのような状態を避け常に快適に過ごせる状態を維持する習慣を身につけていきたいものです。

（山口弘泰）

中学二年便り

クリスマスを迎えて

毎年、クリスマスを迎える時期になると、とても楽しい気分になります。多くのキャロルを歌うキャロルサービス、厳かな雰囲気で迎える深夜ミサ、皆でイエスの誕生を祝うクリスマス礼拝とその後の祝会。二十四日の夕方から二十五日の午後まで、礼拝と行事が続き、これらが終わって、やっと冬休みが始まる気がします。

クリスマスの礼拝で、毎年必ず読まれる聖書の箇所があります。

「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった。万物は言によってなった。なったもので、言によらずになったものは何一つなかった。言のうちに命があった。」

（ヨハネ一章一節から）

この聖句は、最も好きな聖句で、いつも身が引き締まる思いがします。繰り返される「言（ことば）」の大切さと重みが伝わってくる気がします。

私達が日常的に発する言も同じではないのでしょうか。スピーチや発表や発言ではなく、日常的に発する言にこそ、思いや人となりがにじみ出ることと思います。何気ない一言で、励まされたり、傷ついたり、悩んだり、気づいたり。

だからこそ、ノリや勢いで発せられる言に気を付けてほしい。自分達の感覚で片付けるのではなく、発せられる言の責任を感じてほしいと願っています。

Happy Christmas!
And have a good holiday!

（後藤　寛）

高校二年便り

厩（うまや）七分に乗り三分

僕の授業を受けたことがある生徒であれば、僕が高校時代に馬術部に所属していたことは知っているでしょう。その馬術部で、タイトルにある言葉を聞きました。これは「馬乗りは、馬の世話（厩舎での作業）が七割で、乗る時間は三割にしなさい」という意味です。つまり、馬と関わるうえ手入れやお世話は重要であるということです。

乗せてもらっている馬に感謝してお世話をして、馬のことをよく知り信頼関係を構築する。信頼関係があるから馬も背中を差し出してくれるわけです。

この言葉は、馬乗り以外にも通じることだと思います。R.I.F.や体育祭は自分自身の仕事もありましたが、同級生や先輩・後輩、教職員が信頼し支えたって行えた行事です。この素晴らしい経験を大事にしてほしいです。スマホゲームばっかりで、関係が薄くなっているように感じます。高校生活はもう終わってしまいますよ！

そういえば、イエスは馬小屋で産まれ、飼い葉桶に寝ていました。高校の時、厩舎の掃除をしながら「よく、こんな所に寝かせたな」と思いました。これは、小さく貧しい者として生まれたイエスをよく表しているそうです。人から高く評価してもらおうと周りに権威を誇示し名誉を高めますが、それは同時に、自分と周りの人たちを切り離すこともあります。イエスみたいにそんな権威や名誉を振りかざさず、みんなの信頼関係は構築されたはずです。今後もそのようにすごしてほしいです。良いクリスマスを。

（吉井佑介）

中学三年便り

中三の冬

冬休み前、部活を終えて帰宅する頃には、すでに星空となっています。冬の王者オリオンがようやく地平近くに顔を出し、むしろ目立つのは西空に夏の大三角が沈もうとする姿です。クリスマスのイルミネーションからふと見上げる星々です。今冬は中天に木星がひときわ明るい輝きを放ち、瞬間どこか違う世界にいるような感覚になります。

量子もつれという最先端の物理の考えによると、この世界は仮想現実であって、観測して初めて存在する、らしいです。誰も見ていないものは存在しないというのは不思議な話で、アインシュタインも納得しなかったのですが、最新の研究ではこの不可思議な事柄がどうやら正しいのだそうです。

だからといって、やはり現実世界が、見ないことで無くなるわけではないのがつらいところで、真理を探求する力を育む努力が求められます。中三は、春休みを除いて初めての、休み明けにテストがないという感動的な状況です。高校数学の教科書的なものを始めてみるのも良いと思います。名作映画を鑑賞しまくることも考えられるでしょう。おすすめは、将棋の棋譜ならべです。駒の動きを再現し、解説を読むことで指し手の意味がわかり、感動をおぼえるはずです。

ちなみに、中三のY君は星空ライブ中継からの流星観測を始めました。宇宙探査をリアルにできるのもこの時機ならではと思います。

知らない世界のことを知ることが生きる喜びになる、そう言った経験がつめるような生活を心がけたいものです。

（宇津木千秋）

高校三年便り

将来に向けた日常生活

先日、宇都宮ライトレールという、路面電車に乗りに宇都宮へ行ってきた。数十年ぶりの新規路面電車で、車両も先進的で話題性も十分。それは気になるということで湘南新宿ラインをひたすら乗った。新幹線もあっという間に着いてしまうので時間は買えるが、周りの景色をゆったり見られるのでこちらのほうが時間さえ許せば好きである。稲刈りの終わった田んぼ、こんなに太いのかと思わせる利根川の橋梁、秋の景色が多種多様にみられるところもよい。

宇都宮について早速路面電車へ向かうとすでに行列。開業から数か月たつのにこれ目当てできた同業者がわんさか。人気がここまでとは思わなかった。さて何とか席を確保して乗車。約四十五分の乗車の間に陸橋や橋梁、専用軌道、急坂など多種多様な場所を走って四百円。アトラクションとしては大変面白いので是非お勧めである。

なぜこんなことをホルトノキに書いているかというと、高校三年生はもう卒業が近い。卒業論文を色々と読ませてもらったが、このような都市計画を考えている論文もあった。論文だけではなく、将来は実際に計画に携わる生徒もいるであろう。そう考えると大変興味深く、是非とも皆が喜ぶようなものを実現させてほしい。その実力が君たちには備わっている。

さて、高校二年生以下にとっては、このような路面電車も卒論の題材になるであろう。是非参考にしてほしい。と思いながら、餃子を食べて東京へ帰るのである。

（對馬　剛）